

# 感動県政 あさのめ新聞

## 埼玉県議会活動報告 2021.12.24 vol.72

発行 埼玉県議会議員 浅野目義英 〒330-0075 埼玉県さいたま市浦和区針ヶ谷2-7-8 TEL:048-762-7133



### 一般質問に立ち、8項目を訴える

1	新型コロナウイルス対策、格差解消に向け総力戦で	知事
2	「戦没者を追悼し平和を祈念する日」になぜ半旗は掲揚されないのか (1) 今年の状況について ア 埼玉県警施設 イ 県警察諸施設 ウ 県教育施設 (2) 来年について ア 県教育施設 イ 埼玉県諸施設	福祉部長 警察本部長 教育長 知事
3	硫黄島の御遺骨を入間基地で知事が出迎えるべき	知事
4	喀痰吸引のニーズ、研修受講者のニーズに応えることができるか (1) 研修場所について (2) 第三号研修の実態について (3) 喀痰吸引に対応した職員配置について (4) 介護福祉士について	福祉部長
5	街路樹受難の時代を見直せないか ～日本一のけやき並木の現状と今後の街路樹整備の考え方について～	県土整備部長
6	タンDEM自転車の公道走行を契機とした利用拡大のための方策について (1) 利用拡大のための周知について (2) 安全運転マニュアルの必要性 (3) 「埼玉県自転車活用推進計画」への位置づけ (4) 交通安全の観点からの課題について	県民生活部長 県民生活部長 県土整備部長 警察本部長
7	分身ロボット OriHime を、けやき特別支援学校で複数台導入せよ	教育長
8	分身ロボット OriHime は、ALS 患者の方など重度身体障害の方の生きる力に活用できないか	福祉部長

10月4日、私は埼玉県議会において8項目の一般質問を行いました。喫煙の職員不足で不条理に立ち向かう人々を守ることに、コロナの予熱の中、格差解消の方策について、平和を希求し誇りある埼玉県を作り上げることに、分身ロボットを活用して、新しい時代の創造についてなど8項目を訴えました。2p・3pに、その報告を載せました。(質問5・6については紙面の都合で割愛しました)



### 予算要望書・政策要望書を提出

次年度(令和4年度=2022年度)の『埼玉県予算要望書・政策要望書』を、大野知事へ提出しました。組織、団体、組合、県民、多くの方々から、直接拜聴または、お手紙、メール、オンラインなどで賜りました数多くのご意見を、5つのブロック

- ①命イノチ・医療、福祉、介護
- ②誇り・文化、スポーツ、教育、平和
- ③緑・環境、農林水産、公園
- ④守・マモリ・危機管理防災、警察
- ⑤巡・めぐり・産業労働、県土整備、都市整備

にまとめ、予算要望書・政策要望書を作り上げました。埼玉県全体をカバーした埼玉県新時代に向けた、私からの要望は531項目になりました。



視覚障害者の方に有効とされ全国に設置されてきた音響式信号。「カッコー♪」「ピヨピヨ♪」の音で歩行者の注意を知らせるものを聞いたことのある人も多くはあります。しかし、この音響式信号は実によく聞こえないという欠点があります。近隣住民の生活からすれば切実な問題であり、音量を下げる、夜は音を消してしまうなどの調節手段が取られてもいました。

昨年からのこの問題が出ている交差点の課題に取り組み、埼玉県警察本部と話し合いを積み重ねてきた私にとり、朗報が飛び込んできました。スマートフォンで信号の色を音声や振動で伝え道路横断を支援する装置を、課題のあったこの「県庁第二庁舎入口」交差点に設置する方針を決めたとの知らせでした。

この高度化PICSと言われる歩行者支援装置は、専用のアプリをダウンロードすると(無料しかも簡単!)、交差点に取り付けた機器から近距離無線通信「Bluetooth」でスマホに信号の色などが伝わり、音声や振動で通知される仕組みです。安全性は飛躍的に向上するはず。今後は浦和区に1か所だけですが、今後全県カバーで設置場所が増加することを強く要望してゆく決意です。



「県庁第二庁舎入口」交差点

浦和区に、視覚障害者の命を救うために埼玉県内初・歩行者支援装置高度化PICS

「あの鉄柱は錆だらけで不安」「倒壊の恐れがある」と、浦和区針ヶ谷二丁目自治会の方からお声が届けられました。県の道路環境課から市の道路環境課へ連絡を入れて頂き、「1か月以内に撤去します」との回答。錆だらけでポロポロになった交通標識柱が所要時間2時間で静かに撤去されました。大原陸橋東側交差点に立っていたこの鉄柱。倒れたら大変なことになるところでした。



「大原陸橋(東)」交差点

### 劣化した交通標識柱、信号制御機一刻も早く撤去新設を

交通標識柱のみならず、埼玉県内には、1万3266基の信号制御機があります。耐用年数は約19年ですが、これを超過しているものが3497基、全体の33.9%も占めており、設置後25年を経過しているものも699基残っている状況です。安全確保のため一刻も早く撤去、新設される必要があります。

# 第20回 あさのめ 県政報告会

日時 2022年 令和4年 2月5日(土)

開場 17時30分 開会 18時00分 閉会 19時45分

第20回 県政報告会 埼玉県議会議員 浅野目 義英



あさのめ・よしひで 1958年東京都生まれ。山形県米沢市育ち。法政大学社会学部卒。小学校教員を経る。

さいたま市隣接の上尾市で全国最年少の25歳で市議初当選。地縁血縁の無い中で市議連続4期当選(25～41歳)。37歳で全国最年少議長。上尾市長選挙次点敗退。予備校講師、鮎井屋でひたすらマグロを切る仕事、代議士政策秘書など、政治浪人7年余を経る。

2007年、埼玉県議会議員選挙トップで初当選。以来4期連続当選。埼玉県庁の中に6,400㎡の緑の広場を、埼玉会館北側に2,700㎡の憩いの広場をつくらせる、全盲の中学校教師を現場に戻す、児童養護施設出身者が埼玉県立大学へ進学できるよう道筋をつけるなど、必ず成果を上げる実力派県議として知られる。

会場 **ロイヤルパインズホテル浦和**  
● さいたま市浦和区仲町二丁目5-1 4Fロイヤルクラウン

会費 **無料** お身体ひとつでお出ましく下さい。寒い季節でございます。暖かい服装でお越しくださいませ。

適切な感染防止の措置を講じて注意を図りながら開催させて頂く所存です。30分に1回の換気休憩をします。お隣と1.5mの距離をとります。



コロナ感染防止対策徹底

# あさのめ 県政報告会



### あさの目の眼

寒くなってきました。台所やこたつの上など、家の中にみかんの冬風が見られているはず。芥川龍之介に『蜜柑』という小品があります。主人公は憂鬱な気持ちで列車に乗っていましたが、他に誰もいません。そこへ三十三、四のいかに主人公の前に座りました。トネルに入る前と娘は必死に窓を開けようとして、ついに窓が開けられ蒸気が走っていった列車の車内へどす黒い空気が一気に流れ込みました。主人公はむせかえり怒りが満ちてきます。トネルを抜けてから窓の外が途端に明るくなると列車は踏切に差し掛かりました。そこには三人の子供が手を振っているのが見えました。



その時、娘は風呂敷の中から取り出した蜜柑を窓から投げました。五つ六つ宙に舞った蜜柑に両手をあげ、三人は小鳥のような歓声を上げました。娘はおそらく家が貧しいために奉公に行くのであり、弟へ別れのみかんを放ったのでしよう。

大正八年、約百年前の日本の風景です。埼玉県では一四三町のみかんが生産されています。寄居町には約四百年前、小田原から移植された歴史あるみかんが栽培されています。

青空の下、みかん狩りで賑わっている子供たちの声が、百年の時空を超えて、弟たちの小鳥のような歓声にゆっくり変わってゆきます。

お世話になっております。ご意見などお待ち申し上げます。下までお願いいたします。

埼玉県議会議員 浅野目 義英 〒330-0075 さいたま市浦和区針ヶ谷2-7-8 電話 048-762-7133  
あさのめ事務所 urawajimu@asanome.com FAX 048-762-7144  
www.asanome.com y-asanome@gikai.pref.saitama.jp



# あさのめ 一般質問

質問、答弁はすべて約50%要約になっています。全文は、埼玉県議会HP、あさのめ公式HPでも全文を読むことができます。動画でご覧になりたい方はQRコードで視聴出来ます。



## 01 新型コロナウイルス余熱

経済学者ヒケタ氏は、「21世紀の資本」で、資本の方が所得よりも成長率が大きいことを指し、所得格差を指摘した。純金融資産が1億円の富裕層は総世帯の2.5%しかないが、純金融資産額は21%ある。そして、コロナ禍の中、金融緩和が進み資産価値が押し上がり、富裕層への富の集中が進む環境にある。

## 02① 8月15日に、なぜ半旗は掲揚されないのか

政府はポツダム宣言を受諾し1945年8月15日の正午、昭和天皇による玉音放送がラジオから流れ、日本が無条件降伏したことが国民に伝えられた。8月15日は、第2次世界大戦が終結した日。我が国が平和と民主主義の国家づくりを決意した日だ。

## 02② 今年、県警察諸施設はどうだったか?

今年8月15日には、掲揚塔を有する警察本部の各庁舎と警察署の49のうち46で半旗を掲揚した。残りの3は、掲揚塔がなかったため、半旗を掲揚できなかった。

## 02③ 今年、県教育施設はどうだったか?

県立学校では、今年も土曜日であったため、埼玉県庁では掲揚できなかった。浦和高等専門学校では、ほとんどの掲揚できなかった。土日は掲揚する職員がいない、そのことを私は是非はしない。両方から掲揚できなかった、そのことにも非難はしない。

## 02④ 来年、県教育施設はどうだったか?

警察はほぼ全施設で掲揚。けれども埼玉県施設ではほぼ掲揚なし。県立学校は掲揚が僅か2校。埼玉県のほとんどの施設と学校の空には、半旗が掲揚されなかった。理由は、今年も土曜日であったため、雨が降っていたため。

## 02⑤ 来年、埼玉県諸施設はどうだったか?

戦後76年が経過し、戦争を知らない世代が多くなっている。8月15日に戦没者を追悼し、平和を祈念することは大切なこと。来年の8月15日には、県立学校で半旗を掲揚するよう働きかける。

## 02⑥ 来年、埼玉県諸施設はどうだったか?

県の施設で半旗掲揚を行うことは、戦没者への追悼の思いと恒久平和を願う県としての意思の表れと考える。今後は8月15日のような特別な日には、休日でも掲揚したい。



埼玉県知事からの供花

### 用語解説

DXとは・・・デジタル・トランスフォーメーション（Digital-transformation）のことで、ICT技術やデジタルマーケティング分野でよく使われる言葉です。DXの意味は「デジタルを効果的に活用し提供ができるよう、ビジネスや組織の活動・内容・仕組みを戦略的、構造的に再構築していくこと」です。

## 03 硫黄島の御遺骨を、入間基地で知事は出迎えよ

平成28年6月定例会で、私は当時の上田知事にこのように問いかけた。「硫黄島の御遺骨について。やっとたどり着いた望郷の祖国日本で最初に踏まれるのが、入間市・狭山市にまたがる航空自衛隊入間基地であることと御存じか。1年間かけて収容された御遺骨が、年度末に現地から2埼玉県に搬入される。つまり、長き時間を経て御帰国される地は埼玉県である。帰還地の首長として、このことを無視してはいけません。知事から思いを述べてほしい。」

## 04① 痰吸引の研修場所 バランスよく拡大しているか

障害者介護で特に注意する介助の一つに痰吸引がある。痰が気道内に貯留していると呼吸困難、窒息など、命に関わる問題になる。医療的ケアが必要な重症心身障害児・者の方、またALSの患者さんなどが安心して在宅生活を続けていくには、不可欠なものだ。介護職員でも法の一部改正で平成24年4月から一定の条件下で行為が可能となった。併い、介護職員には研修が必要となった。

## 04② 第三号研修の助成金充実させよ

特定の利用者に対して、特定の喀痰吸引などの医療行為を実施することができ、高額の研修費用を養成する第三号研修について、高額な研修費用の助成制度に市町村へ働き掛けをしてほしいなどの提案を当時にしている。充実させていくのか。

## 04③ 痰吸引に対応した職員少ない拡充せよ

実態を明らかにする必要がある。登録機関の数は充実したが、その実態が不安な内容で、利用者にとり困ったことだ。こういうことだ。登録されている重度訪問介護事業所一覧を見て連絡をしても、登録していないだけで、実態は、重度訪問介護事業所の営業はしていない。また、営業しているも、痰吸引に対応しない事業所がほとんど。部長、こんな不条理なことはあっていいかと思う。痰吸引可能な施設を一生懸命探しても、それがなかなか見つからない。命と希望に関わることだ。吸引できる人を増やしてほしい。そのことを私は強く思う。

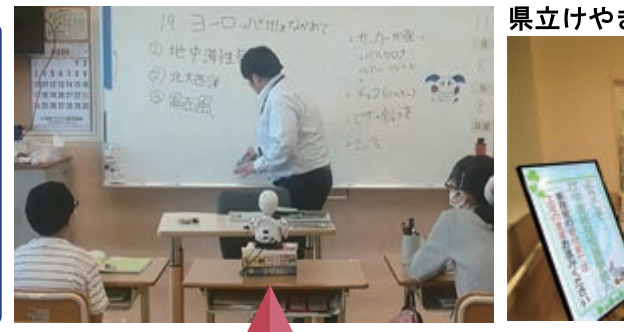
## 04④ 痰吸引必要とする人、不利益にするな

人数はちゃんとそろっているのか、バランスよくなっているのか、そしてこの経費については補助ができるのかなど、様々な問いかけを必要とする。埼玉県の福祉行政のトップとして、痰吸引を必要とされている人が不利益にならないように、その一言をいただきたい。

痰吸引を必要とする方が、困ることなく、その研修を修了している方への周知による、痰吸引に対応できる人材の養成など、積極的に取り組む。

## 07 分身ロボット「オリヒメ」を、けやき特別支援学校に複数導入せよ

20世紀を代表する思想家、ハイエクは次のように語っている。「ある体の弱い子供が、ある社会においては、他の社会よりも多く生き延びるチャンスを持っているかどうかは、その社会の構造に関わることだ。その子の生理的特徴によるものではない。ハイエクのこの言葉は、分身ロボット「オリヒメ」の存在意義と役割の背景を強く押し出している。埼玉県は、「オリヒメ」を一体何台持っているのだろうか、そう思い一生懸命、県庁の中を探した。たった1台だけ見つかった。写真を用意してきた。大変小さな鳥の形の教室の中、1台だけあった。



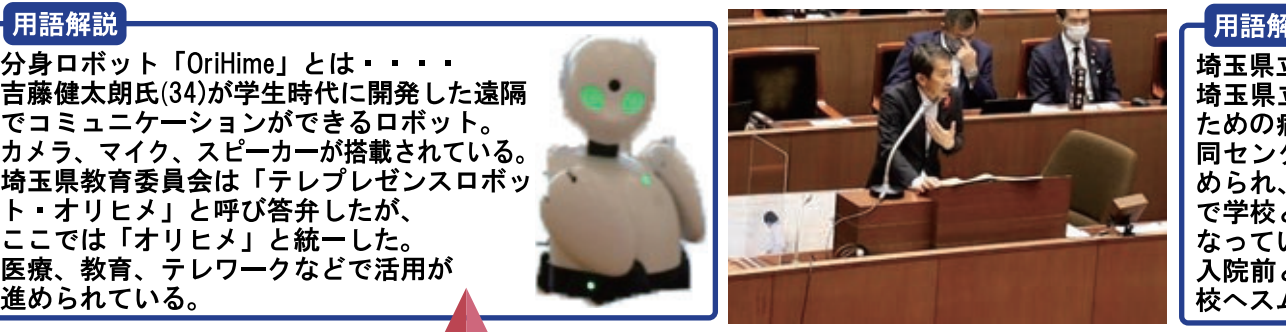
余命の限られた難病の子供たち、重篤な病気が大けがで、治療を余儀なくされている子供たち、小児医療センターには入院をされている。正に体の弱い子供、同センターから併設されているけやき特別支援学校へ、子供たち、治療のために毎日通っている。髪の毛が抜け落ちた姿形を誰にも見られたくない、こういった理由で、けやき特別支援学校に通えない子供たちも少なからずいることを私たちは知るべきだ。教育の機会均等から外れがちな子供たちがいるということだ。「オリヒメ」から授業に参加しているのは正に分身、もう1人の自分だから、学校の教室に置いておけばリアルタイムで教室の様子が見られる。ベッドから先生の話を聞き、自分の発言をし、クラスメイトの声を聞き、手を振る、目を光らせるなど、自分の体のように動かすことができる。有名になったロボット。遠隔で意思疎通ができるなどの優位性が認められ、ベッドの上からでも、まるで教室にいるのと同じ感情の同期ができて、学習に取り組みることができる。時代は、ここまできたのだ。



このロボットの活用で、入院中の児童生徒が、けやき特別支援学校で「オリヒメ」1台を使った実践教育が行われた。画期的な成果があったと認められ、分身体験者に報告されたこと、複製台整備する必要があり、私は思う。県教育委員会にこのことを強く求めたい。

## 08 分身ロボット「オリヒメ」は、ALSの方など重度身体障害の方の生きる力に活用できないか

ALSは、徐々に全身の筋力が弱くなる病気で、自分で食事や呼吸ができなくなる。治療法は対症療法の延命治療、つまり気管切開の呼吸器装着しかない。装着しなれば死を意味する。装着すれば生き生きと中に入れることはできるけれども、絶え間のない絶望から離れることはできない。



分身ロボット「オリヒメ」とは・・・吉藤健太郎氏(34)が学生時代に開発した遠隔でコミュニケーションができるロボット。カメラ、マイク、スピーカーが搭載されている。埼玉県教育委員会は「テレプレゼンスロボット・オリヒメ」と呼び答弁したが、ここでは「オリヒメ」と統一した。医療、教育、テレワークなどで活用が進められている。

議員お話しのとおり、重い障害があっても社会参加や就労につながることで、希望や生きがいをもちたいと考える。それは、誰一人取り残さない社会の実現につながる。県は、「オリヒメ」をデジタル技術を活用した障害者の社会参加促進の手段の一つとして研究していく。民間や他県の活用例を把握し、ロボット開発者、障害当事者、就労継続支援事業所、企業の方々の意見をお聞きし、県デジタルトランスフォーメーション推進計画を踏まえた具体的な取組として、検討して重い障害の方が希望と生きがいを持ち、社会の中で自らの能力を発揮することができるよう、積極的に取り組む。

戦後76年が経過し、戦争を知らない世代が多くなっている。8月15日に戦没者を追悼し、平和を祈念することは大切なこと。来年の8月15日には、県立学校で半旗を掲揚するよう働きかける。

半旗とは・・・国旗などを旗ざおの先から三分の一から半分ぐらい下げられ掲げる旗のこと。東日本大震災3月11日には追悼の想いで甲意を表すため日本中で掲げられている。阪神淡路大震災の起きた1月17日にも甲意を示すため日本中で掲げられている。また、長崎市では8月9日（原爆の日）にちなみ、市内小中学校で毎月9日に校旗や国旗を半旗にする運動が、県原爆被爆教職員会の会の提案で広がっている。

痰吸引を必要とする方が、困ることなく、その研修を修了している方への周知による、痰吸引に対応できる人材の養成など、積極的に取り組む。

分身ロボット「オリヒメ」とは・・・吉藤健太郎氏(34)が学生時代に開発した遠隔でコミュニケーションができるロボット。カメラ、マイク、スピーカーが搭載されている。埼玉県教育委員会は「テレプレゼンスロボット・オリヒメ」と呼び答弁したが、ここでは「オリヒメ」と統一した。医療、教育、テレワークなどで活用が進められている。

議員お話しのとおり、重い障害があっても社会参加や就労につながることで、希望や生きがいをもちたいと考える。それは、誰一人取り残さない社会の実現につながる。県は、「オリヒメ」をデジタル技術を活用した障害者の社会参加促進の手段の一つとして研究していく。民間や他県の活用例を把握し、ロボット開発者、障害当事者、就労継続支援事業所、企業の方々の意見をお聞きし、県デジタルトランスフォーメーション推進計画を踏まえた具体的な取組として、検討して重い障害の方が希望と生きがいを持ち、社会の中で自らの能力を発揮することができるよう、積極的に取り組む。



吉川福祉専門学校より写真提供 喀痰吸引の研修の様子



山崎也部長 山崎也部長

痰吸引を必要とする方が、困ることなく、その研修を修了している方への周知による、痰吸引に対応できる人材の養成など、積極的に取り組む。

分身ロボット「オリヒメ」は、ALSの方など重度身体障害の方の生きる力に活用できないか

議員お話しのとおり、重い障害があっても社会参加や就労につながることで、希望や生きがいをもちたいと考える。それは、誰一人取り残さない社会の実現につながる。県は、「オリヒメ」をデジタル技術を活用した障害者の社会参加促進の手段の一つとして研究していく。民間や他県の活用例を把握し、ロボット開発者、障害当事者、就労継続支援事業所、企業の方々の意見をお聞きし、県デジタルトランスフォーメーション推進計画を踏まえた具体的な取組として、検討して重い障害の方が希望と生きがいを持ち、社会の中で自らの能力を発揮することができるよう、積極的に取り組む。